

——全てのピュアな紳士淑女たちへ捧ぐ——

ドアを開け、手探りで灯りのスイッチを入れる。

照明の光に満たされる、どこにでもあるような平凡なマンションの部屋。一番奥のベッドに並んだ大小のぬいぐるみ達が、部屋の持ち主の個性を主張している。

そろそろ見慣れたその景色を目にして私は一息ついた。

乱暴に脱ぎちさらされた自分よりすこしサイズの小さな靴。上がり込もうとして足に引つかかったそれを、思わず綺麗に揃えてしまう。

「こういう癖って、すぐには抜けないのかな……」

靴を揃えたところで、自分の行儀の良さに私は独り言を漏らしてため息をつく。少しだけ迷って、自分の靴も同じように揃えた。

所狭しと調理道具が置かれたキッチンを通り抜け、ぬいぐるみの並ぶワンルームの部屋へ。部屋着へ着替えていると携帯電話の着信音がした。

『この前教えてもらったバーに、お兄ちゃんとアフターに行ってくるから〜。こんなの初めてだからドキドキ。帰るの遅くなるから先にごはん食べていいよ。冷蔵庫の中の……』

事細かに夕食について指図してくる雪からのメール。営業が終わったドリームクラブの更衣室で、同僚の皆に冷やかされながら嬉しそうにメールを打つ雪の姿が手に取るように思い浮かんでしまう。

「お兄ちゃん、か……」

いつもは雪と一緒に帰ってきている私が、今日は一人なのは雪のアフターがあるからだ。

帰り道の間、あえて思い出さないようにしていた筈のあの人のことがメールをきっかけに脳裏から離れなくなる。

私が思いきってアフターで誘って行ったホテルのバー。雪にも教えてあげたあの店に行っているんだろうか。

普段の言動に反して、奥底では紳士のあの人がいきなり雪に何かするはずがないとは思うけれど、子供っぽい親友のことだ、心配するなという方が嘘だろう。

……心配。私がしているのは、本当に雪の身を案じているだけの「心配」なんだろうか。

今ごろ二人は何をしているのだろう。何を話しているのだろう。私の知らない雪、私の知らないあの人。そんなものが存在すると言う事を考えるだけで、何だかとても不安になる。別に私はあの人と、なにか特別な関係だって訳じゃないのに。

胸の内に広がる暗いものを、かぶりを振って打ち消す。こういう時は好きな映画でも見よう。それが一番。

ベッドの横、部屋の片隅に置かれたボストンバッグがいまの私の所持品の全てだ。

家出することに決めて、でも何を持参すればいいかすら判らなくて、結局執事に手伝ってもらって荷造りしたバッグ。

その中からDVDを取り出してデッキにセットする。

何度も見返したお気に入りの映画。家を出るときに、部屋に

ある映画のコレクションから一本だけ持ち出したのがこれだった。気分がふさいだときには、私はいつもこれを観ることにしていた。

部屋の灯りを落とし、私はタオルケットにくるまって壁に背中を付けて座る。

本編が始まる前の真っ暗な画面が、私を現実から物語の世界へと切り替えてくれる。映画は大好き。物語ごとにそれぞれ違う世界があるなんて、なんて素晴らしいことなんだろう。

育ちは悪いし、無教養だけど温かい心を持った主人公の男が、ひよんなことから知り合った深窓の令嬢と次第に惹かれ合っていく。

一見すると荒唐無稽でいながらも、それでいて観客を引き込む脚本の妙。主人公とヒロインの関係を台詞のみに頼らず描ききる見事な演出。どうと言うことのない曲のようであり、良く注意してみれば常に情景にとでもマッチしている音楽。

この映画を作ったスタッフ達は人を楽しませる娯楽作品というものがどんなものかよく判っていると思う。

劇場で一目見て引きこまれて以来、私はこの映画がずっと好きだった。

そして、いつの間にかヒロインと自分を重ねて観るようになっていた。

「亜麻音チン、亜麻音チンってば」

「うう……」

被っていたタオルケットをはぎ取られ、私は目をしばたいた。

顔を上げれば、眉をひそめて自分を見つめる雪の姿がある。

映画を見ている間に、いつの間にか寝てしまったようだ。

「いくら疲れてるからって、床で寝ちゃダメだよ」

「うん……」

「どうしたの？ 元気ないよ？ そうだ、セツちゃんが特製のオムライスを作ってあげるよ」

オムライス……朝ご飯にはいいかも。そう思いながら窓の外を眺めた私は、ガラスの向こうが真っ暗なことに愕然とする。

「ちよつと待ってよ、まだ夜じゃない。こんな時間にオムライスをなんて食べたら……」

「その自慢のくびれがなくなっちゃうかもね、あはは」

「ちよつと、何言ってるのよ……？」

よくよく眺めてみれば、足元はふらついているし息もなんだか酒臭い。

「セツちゃん、もしかして、酔ってる？」

「よってない、酔ってないよー セツちゃんはいつでも元

気!!」

「どう見ても飲み過ぎじゃない……」

へらへらと笑いながら足元のおぼつかない様子の雪の姿に、さっきまでの憂鬱な気分はどこかへ飛んで行ってしまった。

まったくこの娘は、いつもこうやって飲み過ぎるんだから。

「トントントン お料理するの〜♪ 上手に♪ でつきるかな? きゃはは〜」

「セツちゃん、ちよつと落ち着いて」

今にも踊り出しそうな雪をひとまず落ち着かせ、私は台所に向かう。もし妹がいたとしたらこんな感じなんだろうか。

酒にそれほど強いわけではない親友が、店が終わった後に酔っているのを何度か介抱しているけれど、今日は普段に輪を掛けて酷い気がする。

まさか、アフターの時にあの人に飲まされたとか?

「ほら、水でも飲みなさいって」

「むにゃ…… お兄ちゃん、そんなどこ触っちゃだめだよ」

「セツちゃん? ちょっと、どうしたの?」

「お兄ちゃん…… また一緒にアフター行こうね……」

私がいくら声を掛けても全く起きる気配がない。どうやら、すっかり夢の世界へ行ってしまったようだ。

夢にまで見ている所を見るに、よほど今日のアフターは楽しかったのだろう。

なににせよ、このまま床で寝させておく訳にはいかない。

さっきまで私が使っていた毛布にくるまる雪の服を脱がせ、パジャマに着替えさせてやる。軽い身体を何とか持ち上げ、半ば引きずるようにしてベッドに横たえる。

少しだけ迷ったけれど、私はいつものように雪の隣に潜り込むことにした。

もう寝息を立て始めた親友の身体が私に触れる。酔っぱらい特有の高い体温を背中を感じながら、私は少しだけため息をつくのだった。

……自分が何に失望したのか、判らないままに。

「いらつしゃいませ!! ドリームクラブへようこそ!!」

見習いの娘達の出迎えの声。バイトを始めたばかりの頃、私も同じように挨拶していたことがもう遙か昔のようだ。

「——さん、グラスが空になってますよ? 飲み物を作りましょうか?」

「お、流石は亜麻音ちゃん、気が利くねえ。じゃあ、ウイスキーをもう一杯お願いできるかな? 水割りで」

「ありがとうございます〜」

氷を入れたグラスへボトルから琥珀色の液体を注ぐ。水で割り、マドラーで適度に混ぜあわせた後は捧げ持つて対面に座るあの人の元へ。

一連の動作は今では意識せずとも自然にできるようになった。店の入口に並んで客を出迎える見習いから、フロアの中で客の元につく身分に移ってすぐは失敗してばかりだったのに。「そういや、この店のおつまみの料理って意外に美味しいよね」